

---

# 5番目の蠍

つきもときっくん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

5番目の蠍

### 【Zコード】

Z1557Z

### 【作者名】

つきもときつくん

### 【あらすじ】

前世と来世が同一時間軸に混在する世界。

前世の自分が殺しに来る。来世の自分を殺さなければならぬ。

5人の異なる性格、性別の自分達との関係は、未来は？

# 第一章

## 第一章　岡本日和の場合

あたしにはちょっとした秘密がある。実はエスパー、超能力者なのだ。

と、言つても手を使わずに物を動かしたり、遙か遠くを見るとか、はたまた空を飛べるとか、そんな凄い力ではない。

あたしの超能力はずばり、未来の出来事がほんのちょっとわかる、未来予知なのだ。

でも、これは自分でコントロールは出来ない、突然やつてくる、まるで思い出すかの様に未来が見えてくる代物。

あ、自己紹介が遅れた。あたしの名前は岡本日和おかもとひより、今年高校に上がつたばかりの一年生。カーキ色のブレザー、赤と茶のチェックのスカートの制服が可愛い青葉学園の生徒だ。

入学して一ヶ月以上が経ち、学校にもクラスにも馴染んできた。尤も、あたしみたいな要領のいい人間には馴染むのに努力を要しない。更に未来予知の力までもつている超人だからね。

五月の朝の登校時間。新緑の季節。風はまだ少し冷たいけど、天候は素晴らしい。まるで、あたしのこれから人生を暗示しているみたい。

あたしの予知が正しければ、後ろから声を掛けられる、「おはよう日和ちゃん」って。

「おはよう日和ちゃん」

ほらね。

「おはよう、咲良」

この子は、宮原咲良みやはらさくら、子供の頃からの幼馴染。長い綺麗な黒髪と物静かな口調と態度が特徴的な人だ。でも、実は怒ると怖い人、子供の頃から良く怒られた。別にあたしが悪い子だつた訳ではなく、

咲良が怒りっぽいだけだ。

次は誰に話しかけられるかな？ あたしにはわかっているけどね。

「おはよう、お一人さん」

「おはよう」

「おはよう、相変わらずいい顔してるね」  
このすらりと背の高い男子は、木村悠一、金持ちはお坊ちゃんだ。  
金持ちは憎い。おまけに顔もいい、礼儀も正しく紳士的な雰囲気。  
でも、ずれてる。妙におかしな価値観を持つた人だ。この人も子供の頃からの友達。

そして、この角を曲がると私達を待っている人がいる。

「おはよう、みんな」

と、明るく挨拶をしてくるのは、片平奈羽かたひら なつだ。彼女も幼い頃からの友達。小さくて、明るくて、優しい印象の人。つまり、可愛らしい容姿と可愛らしい言動で周囲を騙くらかして生きている人だ。本人にその自覚がないのも問題。更にあたしと少しキャラがかぶつて面白くない事も多々ある。

「おはよう、奈羽ちゃん。目赤いね？ 寝不足？」

「うん、徹夜でゲームしてた」

「この子は重度のゲーマーでもある。

そろそろ、あの人後ろから慌しく走つて来るはず。

「ぜえぜえ……。おはよう……」

とか言つて。

この人が伊吹圭いぶき けい。特徴のない男、何を考えているかわからない、多分何も考えていない。アドリブだけで生きている不思議な生き物。待ち合わせにも遅刻する最低な人。でも、この中では一番古くからの友達。

「伊吹……、ぜえぜえって擬音か？」

「何か面白い表現だね」

「あんたは、もう少し余裕を持つて行動しなさい」

「圭君は朝苦手だからね」

「ははは……」

「これで私の友達は全部。友達は友達でも親友かな？ 親友とも違うかも、好きとか嫌いとかでもない、気が合つ、合わないでもない。一緒にいると自然、それが一番近い表現かもしない。なぜか、五人で集まると落ち着く。誰一人欠けても駄目、五人で一人つて言つ感覺。

「教室ではいつも通りの日常。何氣ない会話が聞こえてくる。

「まあ、事故にあつてくれてよかつたよ。あいつも振り向いてくれそうだ」

「おお、よかつたじやん」

「ラツキーと言えばラツキーだな」

他愛のない恋愛話や、昨日のテレビの話などに華を咲かせている。だが、あたしは知つている。一時限目のみんなの恐怖に歪む顔を。「体育館からピアノ無くなつたらしいよ？」

「何それ？ 泥棒？」

騒がしい雑談の中、あたしは得意げにホームルーム前にも関わらず、日本史のテキストを広げ勉強を始める。

「岡本さん、まじめだね」

「まあね。準備万端で挑みたいから」

と、前の席の子の言葉に応対する。その子は不思議そうに私を見る。でも、教えてあげない。今更知つても遅い、一時限目は抜き打ちテストなのだ。しかも、問題は全部知つていて、あたしつて天才。でも、答えはわからないから、調べておかないと……。

ホームルームも終わり、授業が始まり、先生が口を開く。

「中間終わったからつて気を抜くなよ。という事で今日はテストをやる」

先生が「どうだ？ 予想外で驚いただろ」と、でも言いたそうな顔で話す。

ふふふ、あたしは先生の想像の遙か上を行く女よ……。今から驚

く顔が楽しみでしょうがない……、ふふふ……。

あたしは、次々と問題を解いていく。調子がいい、多分満点。

本当に人生楽。予知がいつ来るかわからないから不便だけど、それでも、他者より遙かにアドバンテージがある。

お昼休み、学食にダツシユ。大好物のエビカツサンドが今日に限つて売り切れてしまう。急がないと。おっと、その前にやらないといけない事がある。めんどくさいから、放置しておく？ ああ、駄目、あいつはあたしのお財布なんだから。

三階の踊り場、木村悠一の姿見える。私は大声で呼び止める。間に合った……。

「ちよつといひち来て！！」

は驚いたそぶりもみせず、あたしの方に階段を登ってくる。

「大好物のエビカツサンドが売り切れるのよ、大変なのよ」

「た、大変だな……。で、俺と何の関係があるんだ……？」

お金貸して！

あなたには懲りて手を差し出す

あたしは、  
そういうひとと学食にダッショ。

一金持てんじやねえか

その時、下の階でガラスの割れる音が聞こえる。私は知っている、強風か欠陥かは不明だけど、二階の踊り場の窓ガラスが落ちる。それが、丁度悠一に直撃するはずだつた。

ふふふ、間に合つた。大好きなあたしのエビカツサンド。エビカ

テーブルはつと。目を瞑つたつてわかる。そこに咲良と奈羽がい

るはず。柱の裏、そして窓際、いつもの一人が席を取つていてくれる。これは予知でない、いつものこと。咲良と奈羽はお弁当で昼食を買いに並ぶ必要がないから速い。

咲良と奈羽が手を振る、あたしも振り返す。

「合唱部がね、正式に部活として認められたよ」

大好物のエビカツサンドを頬ばつていると、奈羽が言つてきた。そういえば、奈羽が前に言つていたような……。部活にする為に人数が必要だから力を貸してつて。それが、合唱部。合唱の経験なんてないけど、奈羽があまりにも必死だつたから、了承してしまつていた。

「よかつたね、奈羽ちゃん。凄い頑張つてたもんね」

「うん、ありがとう」

咲良と奈羽が嬉しそうにしている。ちなみにメンバーは、この三人の他に木村悠一と伊吹圭も。つまり、いつのも五人。

「今日は色々準備あるから、正式な活動は明日からかなあ」  
いきなり明日? 心の準備が……。合唱つて歌うんだよね? 困つた。それでも、楽しそうに、嬉しそうにしている奈羽を見るのは好き。乗り気ではないけど、黙つておこう。

危ない、この可愛らしい容姿と可愛らしい言動に騙されかけた……。

「いつたい、いつになつたら、どこでもドアが開発されるんだよ……」

意味不明な言葉を発しながら現れたのは伊吹圭だ。

「夜更かししないで、早く寝ればいいんだよ」

奈羽が笑顔で答えているけど、なに? 会話が成立している?

「それが出来たら苦労しないよ……。今日早く寝るためにね、昨日も早く寝ておかないと、眠れない。もう無理」

圭は、テーブルに座り、買つてきたラーメンをすすりながら、何やら意味不明な事を言つ。

「じゃあ、明日早く寝る為に、今日は徹夜する、なんてどうでしょ

「う？」

「普通に死ぬ」

一日位徹夜しても死なないよ……。その前にこの一人はいつたい何の話をしているの？

「瞬間移動でもあればいいのにね」

咲良が会話にくわわる。

「そんな、非科学的な……。超能力なんてないよ  
超能力という単語にピクリと反応してしまった。良く見ると、そう言つたのはいつの間にか隣に座つっていた悠一だ。

「超能力って、あつたら便利だよね。お掃除とか？」

「でも、超能力って身体に悪いらしいよ。本来、人間には無いものだから使うと負荷が凄くて寿命縮むんだって」

「嘘……？」あたしはこのエビカツサンドの為に寿命縮めたの！？  
「寿命以前に超能力があつたら、実験とかに使われそうだな。更に嫉妬とかなんとかで命を狙われそうだ」

あたしの知らないところで、そんな話になつっていたの！？

「どうした岡本？ そんなに睨んで。エビカツサンドに恨みでもあるのか？」

不意に悠一に話しつけられて、大きく驚いてしまった。

「え？ ないない。エビカツサンドはあたしの血液だよ。恨みなんてある訳ないよ」

やばい、不自然だつたかな？ あたしが超能力者だつてばれたかな？ 実験されるのは嫌だよ……。

やばい、ここは逃げよう、逃げるしかない。

「あ、あたしある先するね。職員室いかないといけないんだつた。またねえ」

あたしはみんなの返事も聞かずに一田散に逃げる。実験怖いよお

……。

はあ、びっくりした。あたしは教室に戻り、自分の席で一息つく。

実験は置いておいて、寿命が縮むつて本当かな？ 単なる噂だよね  
？ どうみつけよ！？

「ねえねえ。片平さんと仲いいよね？」

「悩んでこる最中に話しかけられた。片平？ 奈羽の事ね。

「うん。幼馴染だよ」

「あと、なんだっけ？ いつも一緒にいる、伊吹君」

奈羽と圭がどうしたんだり？

「うん。一人共幼馴染だよ？ それがどうしたの？」

あたしはちょっと疑問形で答える。

「伊吹君が片平さんに告白したって聞いたけど、どうなったのかな  
あつて思つて」

告白？ はて？

「なんの告白？」

「え？ お付き合いでつて言つ……愛の？」

「ええ！？ 駄おー？」

せつときはそんな素振りはなかつたよー？ いや、あつたかも？

どうひよー？

「あ、せつときはわからないよ？ 噂になつていてるから、本当の  
ところはどうなのがなつて。ほら、片平さん人氣あるから、みんな  
気になつていてるんだよ」

奈羽は男子から人氣が高い。小さくて、華奢で、明るくて、可愛い、一見凄く性格も良さそう。みんな騙されている……。あの子は作つてはいないうけど、それは世の中をつまく渡つていく為に身に着けたスキルが癖になつていてるだけ。本当はもつと性格が悪かつた気がする、子供の頃の記憶だけど……。

その奈羽と圭がねえ……。気になる。

「気になる。あたしも聞いてみるね」

「うん。無理しなくていいからね」

話題を振つてきた子はどこかへと行つてしまつ。今までなんだけ

？ はて？

でも、聞くにしても、なんて聞こいつ。放課後になつてしまつた。五月の下旬、日の入りは遅く、まだまだ陽は高く日差しも厳しいけど、時折吹く風が冷たい。夏は遠い。なんて考へてゐる暇はない。校庭の外周にはイチヨウの木が数多く植えられている。その大きさ、形は不揃だ。でも、それは、生徒それぞれがお気に入りのイチヨウの木を見つけるといった楽しみを提供してくれる。あたしのお気に入りはこれ。特徴は？ と、問われると困るけれど、大きくも小さくもない、形も良くも悪くもない。特徴がない。でも、あたしには聞こえる、「私を見て」って。なんて考へてゐる暇はない。

枯れ草が目立つ芝生。夏になると一面に真つ青な芝生が広がるのかな？ でも、今はライトブラウンの世界が広がる。時折吹く、冷たい風にサラサラと抵抗もできずに揺らされている。それは、命のない者達の残音。ああ！ なんて考へてゐる暇はない！ 奈羽はどこいつた！？

いた。奈羽は何やら色々荷物を持つてゐる。ダンボール箱にボスターみたいなのとか。

「奈羽？ 少し持とうか？」

華奢な身体に大きな荷物。何か大変そう。

「あ、日和。大丈夫だよ。結構軽いから」

奈羽は笑顔で答えてくれる。

「ふうん……。重そうに見えるけど……。部室に持つていいくの？」

「そそ。明日楽しみにしてて。きっと素敵なお合唱部になるから」

あたし達は歩きながら話す。向かう方向は旧校舎。文科系の部室が多く入る校舎。怪しい部もあり、出来れば近寄りたくない。

「ねえ……。圭はどうなつてるの……？」

あたしは思い切つてストレートに聞いてみた。

「好きだよ」

ええ！？ あたしの知らないところで世の中動いてる…？

「それがどうしたの？」

奈羽の無邪気な笑顔が痛い。

「あ、うん……。あたしに口を挟む権利なんてないし……。よかつたね……」

「日和、全てここからだよ。憶えておいてね」

「え？」

「何の話？」奈羽は、たまに話しが飛ぶ時がある。「この子は頭がいい、あとで思えばわかるけど、想定される会話のやりとり、恐らく、そんな会話になると、言つたやつとりをショートカットして行く。次の変化が来るだらう」という会話まで一気に飛ぶ。集中していないと付いていけない時がある。多分これもやう。「日和、全てここからだよ。憶えておいてね」、でも、どうして、この言葉に繋がるのかがわからない。

「日和、ここからは立ち入り禁止です。明日楽しみにしてね」

奈羽はそう言つと、旧校舎の中へ消えていく。

長話したつもりはないけど、随分と陽が傾き、あたしの影を長く、長く伸ばす。

今日は朝から低調。奈羽と圭の事も少なからずショックだつたけど、今のあたしの心を占める関心事は、すばり「未来予知で寿命は縮むのか!?」だ。

早くも昨日の抜き打ちテストの答案が返ってきた。先生もそんなに急がなくて……。

当然に満点。驚く先生の顔もおかしかつたけど、内心は複雑。テストで百点とる為にあたしの寿命が……。結構予知來ていたけど、もしかして、あたしの寿命はもう少ないの？ どうしよつ。でも、未来予知はあたしの意思に反して突然やつてくる。些細などうでもいい予知とか。その角を曲がると誰がいるとかわかつてしまつ。

でも、これはまだ確定事項ではない。見えない敵と戦つても仕方が無い。まだ、確定したわけじゃないんだから、気持ちを切り替え

よつー

放課後になつてしまつた……。あたしは薄汚れた旧校舎の前に立つ。

「ここにいる理由はもちろん一つ。合唱部の活動初日だからだ。歌うの？ 本当に歌うの？ あたしが？ 嘘でしょ……。

とぼとぼ。今あたしの足音を擬音にしたら、きっとそんな言葉になるだろう。

場所は事前に聞いてある、一階の端の教室。階段を登ると壁には各部の勧誘のポスターが貼つてある。

定番の部活からマイナーなものまで多様。オオクワガタ同好会つてなによ……。いや、それはまだいい。庭部つてなに？ あたしの想像通りなら凄く楽しそうなんだけど。

きつとあれだよね？ なんか小さな箱庭とか作つているんだよね？ お家とか池とか作つて、お人形とか配置して？ ……、やばい、最近現実逃避が激しいよ……。

合唱部前に到着すると、教室前には奈羽を除く三人が来ていた。

「遅いぞ、岡本」

「奈羽ちゃんがね、みんな一斉に入つてきてつて」

「お前はもつと余裕持つて行動しろよ」

最後の言葉は伊吹圭だ。いつぞやの仕返しか？ そちもわるよのあ……。

「そちもわるよのあ……」

やばい、心の声が出てしまつた。

「いえいえ、お代官様ほどでは……」

伊吹圭、古いよ。調子に乗るな。

「じゃあ、行くぜ？」

なぜか、圭が先頭切つて扉を開ける。扉は音もたてずにスースと

開く。

光が広がつた。

綺麗に掃除された教室、壁には音楽のポスター。

「合唱部へようこそ！」

奈羽が両手を大きく広げ嬉しそうに叫ぶ。

その、奈羽の後ろにある大きな物体に目が行く。いやでも行く。「見てみて、ピアノ！ グランドピアノ！ いつも通り体育館から強奪してきました！！」

ちょっと待ちな……。大きすぎて教室の大部分を占有しているじゃない……。グランドじゃなくてアップライトにしておきなよ……。いや、そんな事じゃなくて、強奪つて何！？ 冷静になれ……、多分いつも通り、その可愛らしさに姿と可愛らしさ言動で教師連中を騙ぐらかして運ばせたんでしょう……。

「へえ、思ったより本格的じゃん」

「ここの景色もいいね。私のお気に入りのイチヨウの木も見えるよ」「どれどれ？」

咲良が窓からイチヨウの木を指差す。その前にあんた等……、ピアノへのシッ！」はざむしたの？ ボケたら突っ込むのが礼儀ですよ……。

「気に入つて貰えたら嬉しいなあ」

まあ、奈羽が嬉しそうにしているのは好き。ここのは素直に気に入つた振りをしよう。

「うん。気に入つた。ピアノも、その、かっこいいね……」なぜか、みんながあたしを見る。やばい、タイミング間違えた！？ 何があるの！？ 誰かお願ひ、あたしに空氣の読み方教えて！…「奈羽？ ピアノ弾けるの？」

「もちろんだよ」

よかつた、普通に会話が進んだ。

「今日、この日の為に曲も作ってきたよ。みんなで歌いたくて……」

そう言つと、奈羽はみんなに歌詞カードをくばる。

「じゃあ、最初は私が歌つて見せるね、一回田はみんなで歌いましょう」

奈羽はピアノに座り、弾き始める。凄くゆっくりとしたポップなメロディ。そして、奈羽が、その綺麗な声で歌う。あたしは、その歌声を歌詞カードで追う。

一番目のは私は猫だった、我慢気ままに生きて夢の世界、何も見えてはいなかつた。

一番目のは私は犬だった、猫さんが心配だつた夢の世界、幸せは風の中に消えていく。

三番目のは私は兔だった、何もかもが不安だつた夢の世界、流れるままに朽ちていく。

四番目のは私は羊だった、みんなを見守り続けて夢の世界、みんなと一緒に眠りについた。

五番目のは私は蠍だった、みんなに不幸を振りまいて夢の世界、本当はみんなが好きだつた。

楽しそうな曲調だけど、歌詞がなんか悲しい……。悲しいよ……。

みんなも同じ思いなのか、凄くまじめな表情。

そして、一回目。みんなで歌う。合唱部で初めて歌う曲……。奈羽はどうして、こんな悲しい曲を選ぶの？ あたしはどうせ歌うなら、もっと楽しい曲がいい。泣きそつ……。

部活も終わり、少し憂鬱な気持ちで旧校舎を出る。風が強い。カーンと言う音が間近に聞こえた。

「おー、ぼうつとすんな」  
そう言つたのは伊吹圭だつた。凄く近くにいる。足元には空き缶が転がる。

状況を把握するまでに時間が掛かつた。

「伊吹、大丈夫か？」

「圭君、怪我は？」

「あ、大丈夫。慣れてるから」

圭が手をひらひらとさせるのを悠一、咲良が心配げに見守る。

今日、一日つこてなかつた。明日は、いい日になればいいな。

今日も朝からついてない。合唱部の全員が生徒指導室に呼び出された。先生もいっぱい。かなり怒つている。

「弁解を聞くにうか？」

溜息が漏る。どうして、いじ、高圧的な？

奈羽が一步前へ出る。

「ありません。私共にはなんら関わりのない事柄なので」

「無い訳ないだろ。合唱部の部室に体育館から紛失したピアノがあるんだから」

「ええ。それは不思議ですね」

ピアノを盗んだのが、あたし達、合唱部だと思われている。まず、

奈羽は盗んだの？

「誰がどう見ても、盗んだのはお前等しか考えられないだろ」

別の先生が声を荒げて言つ。

「逆にお伺いしますが、どの様な方法であの様な大きな物を旧校舎の合唱部の部室まで運搬すればよろしいのでしょうか？」

奈羽はにつこりと笑い、話す。

「それは、こつちが聞きたい！」

「そうですね、私はてつくり、親切な方がこつそり合唱部に贈り物をしてくれたものと考えていました」

「ふざけるな……。おい、岡本！ お前はなんか知らないのか！？」

急に怒鳴られビクッと反応してしまつた。

「え？ あ、はい？」

何か話そうと思つたときに奈羽がすつと手を出し静止される。

「何も言わなくていいよ。大丈夫だから」

奈羽はあたしに優しく笑いかけ、そう言つた。

「合唱部の部長は私です。部員達を守る義務がありますので、質問は私にして頂けますか？」

奈羽はどうして、こんなに強気なんだらつへ、本当にピアノはどう

うしたんだろう？

思い出した。最近は呼ばれないけど、中学までのあだ名は「ミクルナウ」だった。この子は奇跡を起こす。多分きっとそう。そんな訳ないでしょ……。

「本当にお前等じゃないのか？」

「はい。確かにピアノの紛失による利益を享受しているのは、私たち合唱部です。ですが、不正により利益を享受している者が必ずしも犯人とは限りません。その、図式が成り立つてしまつたのならばこの世界は冤罪で溢れかえつてしまします。私共は善意無過失です。ですので、ピアノの所有権も合唱部にあります。それでも、こちらに過失があるとおっしゃるのならば、先生方にはピアノの運搬方法並びに、その他物的証拠若しくは、法的根拠の提示をお願い致します」

難しくて、意味不明。寝そう。ああ、奈羽のお説教は耳に心地いい……。

あれ？ 奈羽は強奪したとか言つてなかつたつけ？ ちらりと他の三人を見ると、あたしと同じように睨にらみを送る。いや、良く見ると寝てない？

「わかつた……。この件に關しては調査する。行つていいぞ」

「ご理解して頂けて感謝致します」

奈羽はいつたい、どこからそんな言葉が出てくるの……。

「しかし、本当にどこから出てきたんだろうね？ あのピアノ。偶然にも泥棒さんが部室に隠してたのかな？」

生徒指導室から大分離れ、聞こえないと思い、あたしは背伸びをしながら言つ。そもそも、奈羽が強奪したって言つたのも、あたしの聞き間違いかもね。

「日和ちゃん。偶然なんて有り得ない。全ては故意の連續により起きた必然。起こるべくして起きた事象」と、咲良が言つた。なんか今日はみんな難しい言葉を使う。意味不

明。

でも、なんか咲良……、怒っている? 顔色も悪い……、どうしたんだろう?

「ちょっとね……。気になっていたんだけどさ……」  
圭が何やら、むかむか言つてゐる。

「岡本のさ……。後頭部にあるさ……」

いつたい何を言つてる、こんな時に……。はつきりこ……え?  
何氣なく頭を触つたら……、何これ?

「ああ、俺も気になつていた。ちらちらつてさ」

……。ヘアピンにビール袋付いているんだけど……。ああ、そ  
うか、朝からカサカサ、カサカサうるさいなあつて思つてたよ。早  
く言え……。こんな物付けて、あたしはお説教されたのか……。  
先生も面白かつただろうなあ、もしかして許して貰えたのは、あた  
しの手柄? あたしつて天才。ふう……。

授業も全然集中できない。先生の声が子守唄に聞こえる。  
最近どうも運が悪い。今朝の事にしても、昨日の空き缶にしても。  
どうしたんだろう? どうして急に? はて?

いい日もあれば悪い日もある、それが人生だよね?

どこかの偉い人が言つてたよね。人生の運の総量は決まつてるので。だから今、運が悪くてもきっと、いつか幸運に恵まれるつて。  
きっと明日はいい日になるよ。

……。ちょっと待つて。あたしは未来予知で不運を回避して幸運  
を掴んでいるんじゃないの? つまり、運を不正に引き出している  
? 将来の運貯金を使つている?

よく思い出せ……。急に運が悪いと感じじるよになつたのは昨日  
から。昨日はなにがあつた……?

「あああー!」

授業中に思わず叫んでしまつた……。

「ど、どうした岡本……?」

「あ、いえ、なんでもありません、すみません！」

「うう……、クラス中に笑われた……。」

そんな事より、昨日はロト7の抽選日だった。そう、あたしは買っていた……。多分、というか、間違いなく一等。

人生の運の総量は決まっている。つまり……、人生の運を全部使いたしてしまった！？

この歳で！？ あ、でも、超能力って身体に悪くて寿命縮むんだつけ？ そか、じゃあ老い先短いのか、よかつた……。よくないよ！！

「はあ……」

溜息ばかり出る。お昼休みは、珍しくお外で食べる。お気に入りのイチヨウの木の下。

「大好物のエビカツサンドも美味しくないや……」

色々考えたけど、全部、あたしの想像で決まった訳じゃないんだよね……？

更に言えば、これは未来予知ではなくて、あたしの想像力が逞しくて、たまたま的中しているって事はないかな？ ……。テストの内容やロト7の的中番号が想像出来てたまるか……。

特徴のないイチヨウの木。新芽が多く芽吹き、今から夏が楽しみ。「あんたは特徴ないから、変わった形の葉っぱにするんだよ。例えば、葉っぱじゃなくてお花を咲かせるとか？ きっとみんな見てくれるよ」

イチヨウの木を見上げながら囁く。

「一人で何やってんだ？ 咲良達と喧嘩でもしたのか？」

と、言いながらやつて来たのは木村悠一。すらりと背の高い、顔のいい男。悩みの無さそうな顔してやがる……。

「悠一……。ふつ……、あたしは悟ったのよ」

「何をだよ？」

「お金はね、命より重いって事をよ。あたしの命はお金に負けちゃ

つたのよ

「はい？ どんだけ軽い命なんだよ……」

悠一はあたしの隣に座る。

「もう！ 金持ちが憎い！」

「何言つてんだよ？ それに俺は、岡本の財布じゃなかつたのか？」

なら、お前も金持ちだろ？」

ムカッ。もうお金なんていらない。それに、あたしのお財布とか言つていたのは冗談だよ。真に受けけるな。

「高校上がつてさ、これからが楽しみだよな。海とか花火とかさ？……。ちょっと待つて。これが噂の死亡フラグ！？」

「そうね。凄く楽しみ。みんなでずっと一緒にいれたらいいね」とか言つたら確定！？ あれ！？ 心の声が泣けやつた、びびりよづー？

「いれね。ガキの頃から一緒にだつたろ？ これからも変わらないよ」

ちょっと待つて、悠一も。さつきの発言はどう見ても、あたしらしくない発言だつたでしょ、気付け！？ あたしの人生どうなるの！？

ふう……、少し興奮しそぎた。喉カラカラ。

「そついえばさ。変な噂あつたね？ あんたが女言葉使つてるとかなんとか？」

言つた後に後悔……。どう考へても、ただの誹謗中傷だよね……、しまつた。

「ああ、あれか」

「まあ、あんたも顔いいし、お坊ちやんだし、やつかみ多いね……。あんまり気にしないでね……」

「別に気にしてないよ。事実だし」

「ええ！？」

「うん？ 意外か？ あればな、何でいうか、喋り方が移つた。岡本の」

「なんですよー?」

「なんでだろうな? 印象的だから? でも、岡本でよかつたよ。これが咲良や奈羽だつたら、ただのカマだよ」あたしだと大丈夫なの……? そう言って頂けると光榮です。

ペタペタ。変な音。これは、あたしの足音。

ヒタヒタ。変な音。これは、誰の足音?

夕焼けが綺麗。少し肌寒いけど、でも、十分に過ごしやすい。夏は大好きだけど、梅雨は大嫌い。だから、複雑。ずっと、今の季節でもいいかなって思つてしまつ。でも、夏が恋しくなるのかな?好きな事をする為には嫌な事も我慢しなければいけないって言うよね。だから、梅雨も我慢する。その先に明るい未来があるから。

ヒタヒタ。変な音。さつきより、すぐ後ろにいるような気がする。時間と共に影が伸びていく。少しづつ、あたしより前を歩くようになる。あたしも負けずに少しづつ、歩を早める。でも、影である彼女もそれに合わせるかのように歩を早める。

いつまで経つても追いつけない。少しづつ、差が広がる。あたしは一生追いつけないのかな?

ヒタヒタ。変な音。もう、すぐ後ろにいる。あたしは彼女に追いつけないけど、他の誰かは、あたしに追いつける。後ろの誰かなら彼女に追いつけるのかな?

……。つて、誰よ!?

怖い……。振り返れない。現実逃避も程ほどにしないと危ない……。

まさか……、実験!? それとも、ロトフ!?

家までもうすぐ、でも、今急に走つたら不自然じゃない? 追いかけてこない?

どうしよう……。誰か助けて……。

こんな事なら未来予知なんて始めから無ければよかつたのに。あたしが望んだ訳じゃないのに。嫌な事ばっかりだよ……。なんか涙

出てきた……。

それから、あたしは家に着くまで泣き続けた。後ろの人の気配は気が付くと消えていた。

昨日は知らない人追いかけられたり、ついてなかつたけど。今日のあたしは幸運に恵まれている。

バケツの水をひっくり返してしまったけど、丁度モップ掛けの練習をしたかったところだ。ついてる。

階段から落ちそうになつたけど、手を伸ばしたら丁度手すりがあり、掴む事ができた。幸運にも下まで落ちずに、お尻を少し打つて涙目になつたくらいで済んだ。ついてる。

未来を予知していないのに、エビカツサンドが売り切れでおらず、ちゃんと買う事ができた。ついてる。

運なんて、同じ状況でも人によつて幸運にも不運にも取れる曖昧なもの。そんなものに振り回されてたまるか。

今日も、お昼は咲良と奈羽には一声掛けてから、お気に入りのイチヨウの木の下で食べる。凄く天気が良く、微かに吹く風が心地いい。

このイチヨウの木は相変わらず特徴がない。うつかりすると、その形を思い出せなくなる。でも個性がないところが特徴かも？ 人に限らず、木でも必ずいいところはある。見れば見るほど、この木は元気が良さそうに見える。うん、いい事だ。

「日和ちゃん」

「一緒に食べよ

話し掛けて来たのは咲良と奈羽。手にはお弁当を持ってい

「咲良、奈羽……」

二人は優しく笑つてゐる。なんか、嬉しい。でも、咲良は最近体調が良くないのか、顔色が悪い。凄く心配。自分の事で精一杯で、心配だけど、これ以上心配事を増やしたくなく聞けずについた。ごめんね、力になれなくて……。

「気持ちいいね」

あたし達三人は並んで食べる。なぜか真ん中はあたし。でも、さつきまでおこしかったエビカツサンドが凄くおこしく感じる。

「今日はお揃いか?」

そう言つて歩いて来たのは、悠一。すぐ後ろに圭もいる。

「天気いいからね。悠一と圭も一緒にどう?」

奈羽が無邪気な笑顔で答える。

悠一と圭も加わる。圭なんていつもラーメンのくせに今日はパンを持参している。一緒に食べる気満々じゃない。

「ピアノね。まだ確定ではないけど、合唱部の備品になりそうだよ」

「あれ? 元々合唱部の物じゃなかったの?」

奈羽の発言に圭が答えた。どうして合唱部の物だと思つたのよ…。昨日、どうして生徒指導室に呼び出されたと思つているのよ…。それより、合唱部の備品になるつて、本当に強奪じゃない…。

「先生達に水を指されて、ちやんと活動出来てないけど、早くみんなと歌いたいなあ」

「今更言つのもなんだけど、俺、歌マジ苦手」

「嘘言え。お前カラオケ好きじゃないか。謙遜か?」

「圭君マイク持つと放さないよね」

「訂正。合唱みたいな曲を歌つのはマジ苦手」

「別に曲の制限なんてないよ。好きなのを歌えばいいんだよ。みんなで、それぞれ一曲ずつ選んで歌いましょう」

いつも通りの雰囲気。

「でも、本当は合唱部じゃなくてもよかつたんだ。みんなで、この五人で集まれるなら、なんでもよかつた。今みたいな時間があれば、私は満足」

これは、奈羽の言葉。それは全員の言葉を代表して言つたものかもしれない。

あたしは前に、五人集まると自然つて言葉で表現していただけど、今はつきりわかった。

五人集まると自然なんて言葉じゃ全然足りない。  
あたし達五人が集まると「幸せ」と言つ言葉になる。

今日のあたしは幸運に恵まれた。少し元気が出た。さて帰つて「天国少女・花園メグ」の再放送見よつと。  
ペツタン、ペツタン。変な音。これは、あたしの足音。昨日より軽快。

チリーン、チリーン。変な音。これは、何の音?  
あ……。何かにぶつかつた。  
あたしはよろけてしまつた。

排水溝に片足落ちた。肩が壁にぶかつた。痛い。  
なんか、足痛い。ふくらはぎが擦りむけた。  
排水溝から足を抜くと、靴がびしょぬれ……。なんか汚い……。  
「買つて貰つたばかりの靴なのに汚れちゃつた。ちえ……」  
まつ！ 大怪我しなくてよかつた。ついてる。

足、冷たいよ……。

足、痛いよ……。

肩、じんじん痛いよ……。

なんか、悲しいよ。悲しいよ。

もう歩けないよ……。

あたしは、夕日の中づくまつて泣いた。子供みたいに泣いてしまつた。

よくわからないけど、悲しかつた、寂しかつた、怖かつた。  
やつぱり、ついてないよ。

誰か助けてよ……。

なんか、急にあたしに、ふわっと覆いかぶさつて来た物がある。

それが、人だつてわかるまで、随分長い時間が掛かった。

「日和、大丈夫だよ。心配いらないよ……」

その優しい声は聞き覚えがある。

奈羽だ。

「な……つ……？」

「何も言わなくていいよ。全部知っているから」

あたしは奈羽にしがみついて泣いた。なんかよくわからないけど、

凄く沢山涙が出た。

「少し長話になるかもしねないけど、我慢して聞いてね」

彼女はゆっくり話しだした。

「今日の日和は凄く辛いよね。辛くて、辛くて、泣いてしまったよね。でもね、辛くて、苦しくて、悲しい事も悪い事ばかりじゃないんだよ？」

奈羽の身体、凄くあつたかい……。

「だつて、それがどんなに苦しくて辛い事かわかつたんだから。もし、大事な人が同じように辛い思いをしていたら、理解してあげられる、そして、優しくしてあげられる」

凄くいい匂いがする。何の匂いだろう？ お花？

「生まれつき優しい人なんていらないんだよ。優しい人はそれだけ、過去に辛く苦しい思いをしてきているの。だから、優しくなれるの」

何か心地いい……。奈羽の鼓動が聞こえる、感じる。すごくゆっくり。

「今日辛い思いをした日和は昨日の日和よりもずっと優しい人。そして、これからも日和はいっぱい辛い思いや悲しい思いをすると想う。いっぱい泣くと思う」

凄く耳に心地いい、ゆっくりとしたイントネーション。

「でも、その一つ一つを乗り越える度に、日和はどんどん優しい人になつて行く、誰よりも優しい人になる。私が保証する、日和がみんなの辛さ、苦しさ、悲しみ、その全てを理解して、それを受け入れ、そして、誰よりも優しくしてあげられるつて」

二つの間にか奈羽はあたしの顔を両手で優しく包み、優しく微笑む。

「よくわからないよ……」

「そうね。でも約束して、辛い事があつても逃げない、目を背けないつて」

「う、うん……。頑張る……」

本当に意味がわからないけど、凄く励まされている……。と思つ

「うん。約束。じゃあ、帰りましょう。暗くなつちやう前に」

奈羽は、まだしがみつくあたしを引き離し、立ち上がる。

そして、そつと手を差し出す。

あたしは迷わず奈羽の手を掴んだ。奈羽はにっこり笑ってくれる。夕日の中、一人で手を繋いで歩く。

奈羽はあたしより小さい。でも、凄く大きい。こうして並んで歩いているけど、奈羽が先に歩いて、あたしがその後を付いて行つているような感覚がある。それは、奈羽があたしの手を強く、強く握り締めているから、そう思うのかな？

あたしは一人っ子だからわからないけど、もし、お姉ちゃんがいたら、こんな感じなのかな？ ただ、安心できる。こんな気持ち、久しづり……。

ずつと、このまま手を繋いでいたい。

そう、思うけど家に着いてしまつた。

「足は大丈夫だけど、肩はちゃんと、お母さんに手当して貰つんだよ。あとで腫れて大変な事になるから」

「うん……」

「また明日ね。日和」

奈羽の後ろ姿を、ただ呆然と見送る。

「あ……」

突然来た。未来予知。

「あたし……。明日死ぬんだ……」

少しづつ奈羽の姿が小さくなる。

「奈羽行かないでよ、助けてよ……」

そして、奈羽の姿が見えなくなる。

「な……う……」「

もう声なんて出ない。何も考えたくない。そして、涙すら出ない。いつの間にか空は曇り、今にも雨が降りそう。凄く寂しい雰囲気。奈羽と共にあたしの幸せはどこかに消えていったみたい。

今日は学校を休んだ。昨日の奈羽の忠告を無視して、肩を放置していたら腫れた。

朝から病院。骨には異常なかつたけど、重度の打撲。凄く痛かつたけど、今は鎮痛剤のせいか、平気。

ふとんの中から少し顔を出して、天井を見る。

昨日来た、未来予知の事を考える。

よくわからないけど、あれはどこだろ？ ただ、漠然とあたしが死んでいるイメージ。もしかして、あたしの勘違いとかないかな？ 昨日は凄く情緒不安定で、奈羽の後ろ姿を見送つていてるうちにおかしくなったとか？

別に体調が悪いとかはないけど、鎮痛剤のせいか眠い。うつら、うつら。今のあたしにぴったりの擬音。夢を見た。

子供の頃にうちの裏山にみんなで秘密基地を作つた夢。

「立派なお家を建てましょ！」「

奈羽はいつつもリーダーだった。どうして、そうだつたんだろう？ リーダーらしい言動はないのに。みんなが自然と、その言葉に従つた。

「立派だつたら、秘密じゃないでしょ！」

多少の不平不満はあつたけどね。

「俺、木切つてくる」

圭が奈羽の構想を一番先に実現しようとする。

「今之内に家からこつそり絨毯とか持つてくるね！」

咲良も限度を知らないくらい頑張る。

「作るの、だるいからさ、プレハブでもここに運ばせる？」

悠一は、何でもお金に物言わせる嫌な奴だった。

「悠一、みんなで作ることが大事なのよ。結果なんて関係ない」

意味不明なお説教は奈羽が担当。思い出せば、この頃からかな？

奈羽が得意げな意味不明なお説教をするようになつたのは、今まで洗練されて先生までも騙される。

「どうでもいいけど、日が暮れるまでには建ててよね」

あたしは不平不満担当。

木に屋根の様な物をくつつけて、薦とか葉っぱで補強。簡単な秘密基地だ。中は咲良が自宅から持つてきた絨毯とか本棚みたいな家具がある。

「完成、立派なお家！」

奈羽は両手を大きく広げて大喜び。

そななんだよね、みんな奈羽が、こうやって楽しそうに、喜んでいるのを見るのが好きで頑張っていたんだよね。ただ、それだけだつたよね。リーダーとか関係ないよね。

秘密基地は雨とか風とか、色々な事で、掃除しても掃除しても、すぐ汚くなつて放置されたけど、あたし達の幼い頃の一一番の思い出。夢の中、遠くで変な音がする。鈍い音。

「朋ちゃん、大丈夫？」

「これは何の夢だろ？……。

「ごめん。挫いたみたい……」

そうだ、中学の時のオリエンテーションの時だ。

「困つたね。歩けそうにない？ 先生もいないし、どうしよう？……

班の子が足を挫いて途方に暮れていた。

「圭？ 今どこ？ 男の子達連れて、B地点の少し先まで来て」

そう、話したのは奈羽だつた。圭がいるのかと思ったら、手にしているのは携帯電話。

「今、応援呼んだから、心配いらないよ、朋子

携帯電話の持ち込みは禁止だつたはず。

「携帯持つてゐるの見つかつたら、先生に怒られるよ……」

班の子が言つ。

「気にしない。それよりも、みんなの命に関わるような事故が起つた時に携帯がなかつたらと思うと、そつちのほうが怖いよ」

奈羽は勉強以外で先生の言う事は一切聞かない子だつた。全て自分の判断で自信を持つて自分の正しいと思う事をした。

「来た、来た。圭！ ひつちだよ！」

それから、悠一が足を挫いた子をおぶつて山を降りた。

女子をおぶつた悠一よりも、その他の女子よりも、圭が一番「ぜえぜえ」言つていたのはおかしかつたけどね。

なんか、奈羽の夢ばっかり見るね……。多分の昨日の事が嬉しかつたからかな……。

なんか、鈍い音がある……。

ああ、なんか気持ちよくなつてきた……。ふわふわ……。

飛んで行くような、沈んで行くような……。

気持ちいい……。良く眠れそう……。おやすみなさい……。

### 第二章 木村悠一の場合

夢を見た。

子供の頃に仲間達で秘密基地を作った事、中学でのオリエンテーションなどの夢だ。

「奈羽の事ばかりだつたな……」

俺は木村悠一。そう、木村悠一だ。酷く、片平奈羽への感情で溢れている。

別段、彼女の事は嫌いではなかつた、尤も好きと言つ程でもない。今の様な感情など抱いた事もなかつた。

意外。そう、意外だつた。

「恋愛感情でもない……かと、言つて友人へのそれでもない……。氣味悪いな……」

しかし、岡本の奴、人の事をお坊ちゃん、お坊ちゃん言つて馬鹿にしていたくせに、あの秘密基地の裏山や周辺の土地は全部岡本家所有じゃないか。お前も結構なお嬢だろ……。おかしいと思ったよ、あれだけ好き勝手に木を伐採したのに、何の問題にもならないんだからな。

あ？ 俺はいつたい何を考えている……？

やばい……、現実逃避も程ほどにしないと……。つて、あれ！？  
俺、誰よ！？

木村悠一だ……。それは間違いない……。

やばい、妄想が止まらない……。なんか、鼻血出そうだ……。  
俺はそんなキャラじゃないだろ……。

月曜日の朝。天気がいい。明るい未来を暗示している。  
「じゃあ、行つて来るね」

俺がそう言いつと、両親がピクリと反応した。

「あ、いや、行って来ます……」

俺はいつたい何を言つてゐる……？

おかしい、何かがおかしい。夢のせいか？ 大体、この岡本への妄想はなんなんだ？ まさか、自分でも気が付かないうちに、あいつに惚れたのか？

「そんな訳ないだろ……」

悩みは尽きない。前方を見ると、その話題の岡本日和と宮原咲良の姿が見えた。

「おはよう、お一人さん」

俺は早足で一人に追いつく。

「おはよう」

「おはよう、相変わらずいい顔しててね」

咲良と岡本が挨拶を返す。岡本はいつも俺をからかう。「いい顔してて」とか「お坊ちゃん」とか、言つてな。

まあ、少なからず顔には自信はある。家も地元の富豪だ「お坊ちゃん」なのも間違いない。だが、岡本の言葉を素直には受け取れない、棘の様なものを感じる。

岡本の顔を見る。ショートの髪と、よく変わらる表情。よく動く大きな目。身振り手振りで話す様は可愛らしい。こんな妹が欲しいと誰もが思うだろう。

一方、咲良を見ると、落ち着いた雰囲気、長い綺麗な黒髪。じつと相手の目を見て、優しい表情で話しを聞いてくれる。こんな姉が欲しいと誰もが思つだろう。

「おはよう、みんな」

角を曲がり、明るく挨拶をして来たのは、片平奈羽だ。

なんだ？ これ？ 彼女を見た瞬間、息が詰まつた。

「おはよう、奈羽ちゃん。目赤いね、寝不足？」

「うん。徹夜でゲームしてた」

なんか、泣きそうになる。

なんだよ、これ！？ やばい、本当に涙が零れる。

その時、後ろから慌しく走つて来る足音が聞こえた。

「ぜえぜえ……。おはよう……」

息を切らして走つてきたのは、伊吹圭だ。

「伊吹……。ぜえぜえって擬音か？」

俺は涙を堪える為に適当な事を言つてみた。声に出して言つ事で気分が晴れたのか、先程までの、あの異様な胸が詰まる感情は消えていた。

「何か面白い表現だね」

「あんたは、もう少し余裕を持つて行動しなさい」

「圭君は朝苦手だからね」

「ははは……」

はあ、はあ……。俺は病氣だ。間違いなく病氣だ。

大体、岡本が超能力者つて、何の冗談だよ？ はて？ はて？

教室では騒がしく、雑談に華を咲かす。

クラスの奴に軽く挨拶をしながら進む。

「聞いた体育館のピアノの事？」

それは、不思議と耳に入つた。数多い雑談の中から、まるで、それだけが大声で話されたかの様だつた。

「なんか、先生達が騒いでいたね」

俺は思わず立ち止まつた。ピアノと言つ单語に違和感を覚えたからだ。

「悠一？」

後ろから、伊吹が疑問の声を投げ掛ける。

「あ？ ああ、すまん」

俺と伊吹はクラスが同じだ。他の三人は、それぞれが別のクラス。俺と伊吹だけが同じクラスだ。伊吹の席は俺の三つ前なので、その進路を塞いでしまつっていた。

俺は自分の席に座り考え込む。

が、どうしても思い出せない。

それよりもだ。岡本の件はどう思つ？ ビビりして、俺の知らない岡本の行動を妄想してしまつたのだろうか？ 普通の行動ならば、まだいいが、ちょっと、あれはまずいだら……。やばい、鼻血出てきた……。

病気だろ……、病院行くか……。

いや、なんて讀うんだよ？ 女子高生の私生活を妄想しちゃいま  
すってか？ 死んだほうがマシだ……。

逆に正當ですか？立派な直れなしよな。……

つて、何これ！？ ラブレター！？

これは、ラッキーと言えばラッキーだよね！？

俺は少し、自分自身を見つめ直さなければいけない。

「……。自分……が今まで……どんな人間だつたかすら忘れて……いる。完全に病氣だ。」  
俺は昼食前に倉庫裏へと向かう。手紙の送り主からの指定だ。  
別段、嬉しくはない。よくある事だ。ふふふ、当然だ、俺つて天才。  
「……。日本語になつてないよ……? 誰か助けて……。」

つて、田本語になつてないよ！？　……。誰か助けて……。  
体育館の隣にある、倉庫。二階建ての結構頑丈な作りだ。もし、  
隣に更に立派な体育館が無ければ、こちらの倉庫が体育館かと錯覚  
してしまうだろ？。などと、考へてゐる暇はない。

田が誰はない。田が誰はない。

「Jの街は山々に囲まれた盆地にある。冬は寒く、夏は暑い。いや、夏の暑さは耐えられる。問題は梅雨の季節だ。湿気と高温、まさに熱帯雨林だ。遠くに大きな観覧車が見える。あれは、この苗里市名物「ジェット観覧車」だ。などと、考へてゐる暇はない。

人の気持ちというのはうつろい易い。例えば、天気に左右された

りもする。天気が良ければ気分が良い、悪ければ、その逆。今の俺の気分も、この晴れ渡った天気そのもの。しかし、いつの日かその外的要因に左右されずに自分の内面の心情が反映される日もくるのだろうか？ それが大人と言うものだろうか？ ああ！ などと、考へてゐる暇はない！ 手紙の送り主はどこだ！？

いた。彼女に見覚えはなかつた。尤も、同じ学校と言う事もあり、わずかな記憶の中にはあるだらう、今はゆつくりと思へ出す暇も無い。

「あ、あの木村君、付き合つて下さい！」

うん。それなりに綺麗な人だ。髪は肩よりも少し長い程度、色素が少し薄い、抜いているのかな？ 肌の艶も良い、しつかり手入れされている。岡本とは大違つだ。

「あ、あの。もしかして、他に好き人いるんですか……？」

返答の無い俺に不安を覚えたのか、彼女は言つ。

「その前に名前。まだ名前聞いてないよ？」

「え？ 柳です。柳朋子です。中学の時から一緒の……。一年の時は同じクラスでした……」

しまつたあ！？ だが、そう聞いても名前と顔が一致しない。どこかで見たかもしれないといった程度だ。はて？

思い返して見ると、俺には友達も知り合いも、岡本やいつもの連中しかいない。もちろん、同じクラスならば、それなりに話すが、決してそれ以上にはならなかつた。なぜか？ と問われれば返答に困る。そうだつた、としか言いようが無い。

「他に好きな人がいるんですね……？」片平さんですか？ やつぱり、私では敵いませんか……。そうですよね……。あの人は同姓から見ても綺麗な人です。何をやつても完璧で、先生からの信頼も厚くて。誰でも彼女の事を好きになっちゃいますよね……」

何を言つてゐる……。

「ありがとうございます。奈羽の事を褒めてくれるのは悪い気がしない

これは俺の本心だ。

「今の言葉で諦めが付きました……。」むづかしさ、はつきり言つてくれて、ありがとうございました……」

柳朋子と名乗った彼女は、そのまま走り去つてしまつた。  
つて、俺はつきり言つたか！？ それよりも、どいつもこいつも「なうなうなうなう」つて、いつその事「ナウ教」でも作れ。でも、ナウ様か……。いい響きだ……。俺もナウ教に入るか……。

学食では既に他の四人がいた。いつもの場所だ。柱の裏の窓際。何らやら瞬間移動の話をしている。そういえば、岡本は超能力者なんだつけ？ そんな訳あるか……。

「そんな、非科学的な……。超能力なんてないよ」

俺は開いていた岡本の席の隣に座り言つ。

超能力雑談の中、岡本一人が険しい顔でエビカツサンドを睨み付けている。

まさか……。超能力でエビカツサンドを二つに分裂させるとかないよな……？ 止めてくれよ、そんなミステリー……。そんなにエビカツサンドが好きなら買ってやるよ……。いや、本当に分裂させるなよ？

「どうした岡本？ そんなに睨んで。エビカツサンドに恨みでもあるのか？」

俺は怖くなり、冗談を口にした。

「え？ ないない。エビカツサンドはあたしの血液だよ。恨みなんである訳ないよ」

と、岡本が答える。

そんな事は知つてゐる。余りにも好き過ぎて、人目もばからず超能力を使って、エビカツサンドを二つとか三つに分裂させないか心配なんだよ……。

放課後に何気に遠回りをする。校庭の外周には数多くのイチヨウの木が植えられている。大小々々で遠くから見れば、酷く雑然とし

た印象で、ただの雑木林だと思う事だろう。だが、利点もある。田絵印として有効活用が出来るのだ。過去の先生の名前や生徒の名前が不明だが、様々な名称がある「イルカの木」「アーシェタワー」「信也スペシャル」「闇星一番」などなどである。その名を聞けば、どの場所かすぐに分かる。

奈羽だ。机を一段重ねにして運んでいる。

酷く重そうに見える。だが、歩場が小さく、チョコチョコと少しずつ進む様は、非常に可愛らしい。少し、見てしよう。

あ、転んだ……。

「奈羽、大丈夫か！？」

俺は慌てて駆け寄る。先程の自分の思考を後悔する。奈羽は転んだまま俺を見て言う。

「やつぱりね……。悠一の仕業だつたんだ……？」

「なんですよ……？」

「冗談だよ。でも、今、日和みたいなしゃべり方だつたね？」

やばいよ……、どうしよう……？

俺は、時間と共に岡本になつて行く。自分でも酷く可笑しな事を言つていると思う。まさか、これが奴の超能力か！？ それは、俺だけではなく、学校全体、いや、この街そのものが、既に岡本の超能力攻撃を受けているのではないだろうか？ 全員総岡本化……。

俺の頭の中では「なんですよ！？」「なんですよ！？」と言つ言葉がグルグルと駆け回る。

……。現実逃避が止まらない身体になつてしまつた……。

「悠一？ どうしたの？」

「あ、いや、なんでもない……。机運ぶよ」

俺は、そう言い。机を重ね持ち上げる。重い……。奈羽はこんな重い物を運んでいたのか……、可愛そうに……。

「ありがとう。悠一は優しいね」

奈羽が微笑んでくれる。それは、まるで親に褒められた時の感情

に似ていた。

昔からそうだったな……。俺達五人は家族みたいだと思った事もあつた。兄弟とか姉妹じゃなくて、家族だ。父親或いは母親が奈羽。長女に咲良、その下に俺。そして更に下に伊吹と岡本。呼び方も奈羽と咲良の二人は下の名前で呼ぶのも、多分、俺が一人に甘えているから。他人に泣き言など言わなが、奈羽と咲良には言えた。

「合唱部ね。明日から活動しましょう」

合唱部。奈羽が提案し、創部したものだ。

「へえ。もう活動できるのか。なんか、岡本とか伊吹がしぶつてなかつたか?」

「大丈夫だよ。きっと氣に入ってくれる。私はそう信じている。悠一もきっと氣に入るよ」

奈羽がどこか夢見る様に楽しそうに言つ。そんな奈羽を見るのは好きだ。

「そうだな。そもそも、俺等五人で集まれば、なんだつて面白いよな」

「そうね。本当にそう……」

机を倉庫に片付け、俺達一人は旧校舎の前まで来る。

「日和、あ、悠一か……。ここからは立ち入り禁止です。明日楽しみにしてね」

奈羽はそう言つと、旧校舎の中へと消えていく。

ちょっと待て……。今、俺と岡本を間違えなかつたか? もしかして……、姿形まで岡本に似てきていくのか!? 僕の人生どうなるの!?

今日は朝から低調だ。自分自身に起きた事象について考察し、眠れなかつた。

この岡本の記憶はなんだろうか? ただ、細部に渡り、検証した結果、岡本視点での記憶と俺の記憶での矛盾点は見つける事は出来なかつた。

つまり、事実であるかもしない、と言う事だ。だが、それも俺が無意識の内に俺の記憶から導き出された予測であるかもしない。そんな訳あるか……。それでは俺が別の意味での超能力者だよ……。

それより、問題となるのは、思わず「岡本語」が出てしまう事だ。何度も両親やクラスメートを凍りつかせたかわからぬ……。更に岡本視点での記憶の追跡は危険だ……。出血多量で死んでしまう……。

当然、その様な理由から岡本本人と俺の記憶との一致を確認する術がない。聞ける訳がない……。いつたい、何を言われる事やら……。警察を呼ばれるのはまだ許せるが、それが救急車であつたならば、俺のプライドはもう修復不可能だ。

気が付けば放課後だ。最近、どうも考え込んでしまう。

合唱部の活動初日。俺は旧校舎の一階へと向かう。

薄汚れた壁、ほとんど掃除がされてないであろう階段。隅には綿埃が溜まっている。

階段には各部の勧誘ポスターが貼つてある。オオクワガタ同好会つてなんだよ……。いや、それより庭部つてなに？ 俺の想像通りならすぐ楽しそうなんだけど。

あれだろ？ 庭に芝生敷いてさ、ビーチパラソル挿して、みんなでバーベーキューとかするんだろ？ なんかビニールプールとかも用意してさ？ ……。やばい、現時逃避がやば過ぎるよ……。なんか口調までおかしいよ……。

合唱部の前には既に咲良と伊吹が来ていた。岡本の姿は見えない。

「よつ。中入らないのか？」

「奈羽ちゃんがね。みんな揃つてから、入ってきてつて」

「岡本と一緒にじゃなかつたんだ？」

俺の挨拶に咲良と伊吹が答える。

「いや、知らないな……」

今は岡本の顔を正面から見れる自信がない……。

「悠君。何か悩んでいるね？ 私にならわかるから、いつでも相談してね」

咲良の言葉に驚く。まさか……。咲良も岡本の超能力攻撃を受けているのか！？

更に何か伊吹の態度も異常だ。居心地が悪そうと言つか、視線が泳ぐ。

「ああ……。相談するかもしない。その時は頼む、咲良。俺は平静を装い、そう言うのが精一杯だ。

「うん。待ってる」

咲良が優しく言つてくれる。その時、岡本が暗い表情と、とぼとぼと、まさにその擬音が似合つ足取りでやつてくる。

「遅いぞ、岡本」

「奈羽ちゃんがね、みんな一斉に入つてきてつて」

「お前はもつと余裕持つて行動しろよ」

それぞれが、岡本に一聲掛ける。

「そちもわるよのぉ……」

「お前は悪代官か……。

「いえいえ、お代官様ほどでは……」

「伊吹も乗るな……。

「じゃあ、行くぜ？」

扉の一番近くにいた伊吹が開ける。

よく油が挿されているのか、扉は音もなく開く。光が広がる。

「合唱部へようこそ！」

奈羽が満面の笑みで、両手を大きく広げ叫ぶ。

何か不思議な光景だった。幻想的。そう、幻想的だった。酷く現実感が消えていく。音も消えて行く……。

「見てみて、ピアノ！ グランドピアノ！ いつも通り体育館から強奪してきました！！」

奈羽が何か言っている。だけど、言葉として頭に入つて来ない。でも、凄く涙が出そうだよ……。

あたし、大事な事、忘れてる……。

「ここ、景色もいいね。私のお気に入りのイチヨウの木も見えるよ」「どれどれ？」

……。つて、あたし！？ 嘘！？

はあ、はあ……。なんだ？ 僕はいつたい何の病気なんだ？ もう誰でもいい、救急車呼んでくれ……。

「気に入つて貰えたら嬉しいなあ」

「うん。気に入つた。ピアノも、その、かつこいいね……」

いつたい、この人達は誰と何の話をしているの？

呆然とする。

何か現実感が乏しい。

ゆつくつとしたメロディが聞こえてくる。そして、綺麗な歌声が流れれる。

一番目の私は猫だった、我慢気ままに生きて夢の世界、何も見えてはいなかつた。

一番目の私は犬だった、猫さんが心配だつた夢の世界、幸せは風の中に消えていく。

三番目の私は兎だった、何もかもが不安だつた夢の世界、流れるままに朽ちていく。

四番目の私は羊だった、みんなを見守り続けて夢の世界、みんなと一緒に眠りについた。

五番目の私は蠍だった、みんなに不幸を振りまいて夢の世界、本当はみんなが好きだった。

泣いていいよな……？

マジもつ無理。立つていられない……。

「悠……。そんなに感動する曲だったか？」

「でも、ちょっと悲しい感じするかな」

「あたしも泣きそだよ……。うう……」

「ああ……。日和」ごめんね、泣かないで。大丈夫だからね、心配いらないよ」

奈羽が岡本を抱きしめている。

「あたし、歌うならもつと楽しい曲がいいよ。なあうう……」

「そうね。ごめんね。私の配慮が足りなかつた。次は日和が好きそうなのを選んでくるね」

「誰か、俺も抱きしめてくれ……。咲良……。いや、伊吹でもいい……、お前で我慢する。

だが、岡本も泣いてよかつた。

部活も終わり、旧校舎から出る。

外は風も強く、流れる雲も早い。

驚く程に黒い雲とその合間から覗く、恐ろしく青い空。

既視感。それは、どこから来る思いだらう。

俺はこの光景を覚えている……。

俺はほほ、無意識に反射的に、岡本へと吸い込まれていく空き缶を伊吹よりも早く叩き落していた。

「え？」

伊吹がかすかに驚きの声を上げる。岡本に至つては空き缶の存在すら気が付いていない。

手の甲が少し切れた。少しづつ血が滲む。

誰も声を出さない。

「悠一？ 大丈夫？」

先に声を出したのは、ようやく状況を把握した岡本だった。

「あ？ うん」

傷が深いのか、血が一滴ゆづくと地面に落ちた。

「ああ！？ 大丈夫！？」

俺は岡本に引きずられて保健室に連れて行かれた……。

保険室には先生がおらず、岡本に手当をされる。何気に上手だが、さすがに大袈裟だ。包帯までは必要ない。先程から酷く岡本の記憶が様々思い出される。

「 09 13 14 30 37 38 47 「

と、俺は呟く。ぴたりと岡本の包帯の巻く手が止まる。

「ふうん……。悠一にも予知あるんだ?」

「ないよ。これはお前が買った口トフの番号だ」

「何言つているの? あたしは五口買つてるんだけど?」

「他は知らないよ。これは、お前が予知した番号だ」

「よし。終わり! ありがとね、助けてくれて」

治療が終わり、岡本は元気よく立ち上がり背伸びをする。

「お前、それが原因で死ぬぜ?」

「何言つてるの?」

実際は口トフが原因だったか思い出せないが、凄く関連がある気がする。

「あ、今、予知きた。悠一のその予言外れるつて」「え?」

「でも、心配しないで。当選金の悪用はしないみたい。全額、自然愛護団体のファリアスに寄付するはずだから」

岡本はにっこりと笑い親指を立てる。今まで見た事のない表情だ

……。

「この人は誰? 俺は誰? 岡本日和?」

「おなかすいたあ。晩御飯何かな? 悠一なら知つているよね?」

何か背筋が凍る。

「今ね、色々予知来たんだよ? 悠一が何者かわかつたかも? ふふ、先帰るね」

岡本が保健室から出て行く。

「ちょっと待てよ。お前誰だよ?」

「岡本日和に決まってるじやない? 何を今更?」

今まで、俺の記憶と岡本視点での記憶の食い違いは一つたりとも

なかつた。

だが、今日、始めて食い違つた。そつ、合唱部で奈羽の歌を聞いて泣いてからだ。

そして今まで、酷く身近に感じていた岡本が、別の人見えた。気が付くと、彼女の姿は消えていた。

昨日は全く眠れなかつた。いつたい俺が何をした……。そもそも昨日のあれはなんだつたんだ？ これも岡本の超能力攻撃か？ 何度、病院に行こうかと思つた事か……。でも、本当になんて医者に言うんだよ？

実は俺、女子高生なんですってか？ 死んだほうがマシだ……。逆に奇遇ですね私もです、なんて言われたら立ち直れないよな……。いわねえよ……。

日日に現実逃避が激しくなる……。

最悪な事に合唱部揃つて生徒指導室に呼び出されるわ。何やら奈羽が熱心に語つていて。眠くなつてきた……。ああ、奈羽の説教は耳に心地いいな……。なんでこんなに気持ちいいんだろうな？ 静かな感じなのに耳にすつと入る。一音、一音がちゃんとはつきりしていると言うか、一切濁つた感じのしない話し方なんだよな。決して棒読みではない、低音から高音の移行が凄いスムーズで……。それがぐるぐる……、る……。

「わかつた……。この件に関しては調査する。行つていいぞ」「やばい、寝ていた……。

昼食も一人で屋上に来てしまつた。

生徒もまばらだ。奥では数人の女子が楽しいそうに談笑しながら、弁当を広げていて。混ざりたい衝動に駆られる。

屋上に大きな天体ドームがある。それは、酷く屋上からの景観を損ねている。

「天文部の様にあんな物を買わせるよりは可愛いか……」

と、一人呟く。もちろん、それは合唱部のピアノの事だ。いや、待て。あのピアノってベーゼンドルファだよな？俺の記憶が確かなら、相当高額なはずだ……。先生達も必死になる訳もわかる……。だから奈羽に目を付けられたのか、気の毒に。

校庭を見ると、木の下で大好物のエビカツサンドを食べている岡本が見えた。

「あいつ……。いつも信也スペシャルにいるよな……」

と、呟く。信也スペシャルとは、いつも岡本がいるイチョウの木の事だ。昔の在校生の佐藤信也があの木の下に大量のエロ本を埋めたのが始まりだ。その手の生徒が集いだし、大勢で読むようになり、いつしかエロ本の木、信也スペシャルと呼ばれるようになったとか、ならないとか？ 今だに大量に埋まっているとの噂もある。誰も近寄らないが、恐らくこの学校一有名なイチョウの木だらう。

「田和ちゃんのところに行かないの？」

いつの間にか隣に来ていた咲良の発言だ。咲良も岡本を見ている。

「なんでだよ？」

「うん？ 田和ちゃん元気なかつたから？ 可愛そうに……、あんなに寂びそうにしてるよ……？」

確かに、何か思い詰めているような気がする……。だが、昨日の岡本の態度が妙に心にわだかまる。あれは岡本だったのか？ 俺の記憶にあると岡本とは違かつた。そう、俺の中にある岡本視点の記憶と違うのだ。その記憶によると、俺は今から岡本の所に赴くはずだ。しかし、それでいいのか？ 単純に怖い、その一言に尽きる。

「心配じゃないの？ 田和ちゃんの事好きなんでしょ？」

「なんですよー？」

「しまったー！」

「あら？ 反応まで田和ちゃんにそつくり……。そこまで好きなの

ね？ 奈羽ちゃんに報告してこないとー！」

「だから、なんでよー？」

駄目だ、止まらない……。誰か助けて……。

「そ、それより……、咲良のほうこそ大丈夫なのかよ？ 顔色悪い  
ぜ？」

「「めんね……。私は奈羽ちゃん一筋なの……。悠君じゅや駄田」

「ええ！？ 嘘！？」

俺の知らないところで世の中動いている！？

「本当に日和ちゃんと話しているみたい」

咲良に笑われた……。でも、咲良もそつまづつて事は、やつぱり、

俺は岡本和？

じゃあ、あそこでエビカツサンド食つている奴は誰なんだよ……。  
まさか……、あっちが本物の木村悠一か！？ どんなファンタジー  
だよ……。

いや、待てよ？ あっちが木村悠一だとしたら……、えっと、ちよ  
つと待て！－

はあ、はあ……。この妄想はまずい……。危険過ぎる、ひとまず禁  
止だ。

俺は俺を信用できないぜ……。

……。

信也スペシャル！？ やばい、止めないと！－

「ちよつと、様子見に行つてくる……」

「うん。日和ちゃんの事、お願ひね」

俺は咲良に言い、急ぎ階段を駆け下りる。

「ひ、一人で何やつてんだ？ 咲良達と喧嘩でもしたのか？」

俺は息を整えつつ叫ぶ。

「悠一……。あたし達、これからどうなるんだひづね？」

「え？」

やはり、俺の中にある岡本の記憶と違う。それとも、これは俺の  
妄想だったのだろうか？ いや、でも、これは想像の範疇を超えて  
いる生きしさがある。

そう、記憶ではなく、感情、思い、痛みを伴いながら、それを体

験しているかの様な生々しさなのだ。

「ずっと、みんなで一緒にいたいよ……。夏には海行ったり、花火したり」

死亡フラグ！？ 今度はお前か！！

「いれるか、俺等ガキの頃から一緒にだったろ？ これからも変わらないよ」

とか言つたら確定！？ あれ！？ 心の声が出ちゃつた、ビリしよ！？

「うん。そうだといいね。でもね、不安なんだよ。色々とね」

岡本？

「色々考えるんだよ。昨日、悠一の予知外れるつて言つたの、嘘かも」

え？ 明後日、岡本が死ぬ？

「不安なんだよ……。奈羽も圭も咲良も変だし。あ、あんたが一番変か。悠一もあたしの口調真似するの止めなよ」

真似てはいな……。出でしまうんです……。

「それは、気をつけます……。でも、岡本がそんな事、考えているとは思わなかつたよ」

わからない……。この岡本はどう見ても岡本だ……。じゃあ、俺は誰なの！？ いや、だから木村悠一だろ……。

「それは考えるよ。怖くて、怖くてしようがないよ」

なんだろう？ 素直？ 俺の時は妙に意地張つていたような？

やっぱり、この子誰？ 内面まで岡本になつてきた……。

「誰か助けてよ……」

岡本が震えている……。もちろん芝居には見えない。去来する思いは同情だらうか？

「安易に大丈夫だ、とは言えない状況だけど。俺がなんとかするよ。俺が、木村悠一なのか、岡本日和なのか、もはや分らない。だが、今、目の前にいて、震えている岡本を放置する事は出来ない。その気持ちも、俺の物なのかあたしの物なのかも分らない。」

……。常識が邪魔をして前に進めないよりはいい。

俺はあたしだ。

状況を整理しよう。明後日、岡本日和が死ぬ……。なんで？ な  
んでだろう？ 記憶が曖昧なんだよね。なんか布団に入つて夢を見  
ていたら死んでた？ そんな事あるか……。もしかして病死か！？  
なら、どうしようもないね。諦めろ、岡本日和。

いや、よく思い出せ……。何かあるはずだ。岡本つて頭悪いから  
なあ、記憶力までない。どうやって、この高校入つたんだ？ ああ、  
思い出した、なんとなくわかつたんだ、問題。本当に超能力者かよ  
……。そういえば、奈羽と咲良は凄い頭いいけど、圭つて頭悪いよ  
ね。あれも超能力者？ や、現実逃避も程ほどにして下さい……。  
思い出した。今日、放課後に誰かに付けられていた。尤も、多少  
の記憶違いがあり、実際に起るかはわからない。

だが、もし誰かが付けており、その人物がわかれれば一步前進かも  
しない。

俺は放課後に岡本を待ち伏せする。

来た。ペタペタ言いながら歩いている。

俺はヒタヒタと足音を殺しながら追跡する。ヒタヒタ？ 变な擬  
音。

夕日が綺麗だ。薄いオレンジ色の空に、夕日に照らされた濃いオ  
レンジ色の雲。角を曲がり、夕日を背にして、影が伸びる。少しづ  
つ、少しづつ、影が伸びて、俺の前を歩くようになる。彼は俺より  
も歩くのが早い。俺も負けじと歩を早める。少しでも彼に追いつ  
たい。だが、どこまで行つても追いつけない。どうして、君はそん  
なに歩くのが早いの？ 元々君と俺は一人の人間だったじゃないか  
……。

……。つて、気が付けば岡本が目の前にいる！？ 現実逃避も程  
ほどにしないと……。

どう考へても気付いているよね？

あれ？振り返らない……。声を掛けようかな？岡本？もし  
かして泣いてる？

いや、ちょっと待て……。他に人影はない。

そういえば、俺、結構足音殺して付けてたよね？ヒタヒタって  
？ヒタヒタ？

もしかして、後を付けていたのは俺？

なあんだ。よかつた……。よくないよ！うん？誰も付けて  
無かつたんだからよかつたじゃん。ああ、そつか……。いや、俺が  
付けていた事には変らないから、よくないよ。じゃあ、どっちよ！？  
でも、可愛そつだから、声を掛けよう……。  
……。いない……。

ただ時間が過ぎて行く。ここ数日睡眠不足だつたせいか、昨夜は  
よく眠れた。

人間、割り切れば落ち着く。俺はあたしなんだから。それでいい。  
今日の岡本の予定はなんだつただろ？

全く思いだせない……。思つたけど、これは俺の記憶力が悪いの  
ではなく、岡本本人が覚えていなだけではないだろ？

お昼にみんなでお昼食べました、嬉しかったです。なんて日記が  
見えるぜ……。

学校帰りに奈羽と手を繋いで帰りました、嬉しかったです。と言  
う日記も見えるぜ……。

「悠一。奈羽とか知らない？」

昼食時間に手に大量の菓子パンを持つ伊吹に話しかけられる。お  
前、いつもラーメンじゃなかつたか？

「ああ、多分、信也スペシャルにいるよ。行くか？」

「おう、腹ペコだ」

信也スペシャルに行くと、予想通り岡本、咲良、奈羽の三人が並  
んで食べていた。

「今日は、お揃いか？」

俺は声を掛ける。

「天気いいからね。悠一と圭も一緒にどう?」

と、奈羽が優しく誘ってくれる。俺と伊吹は三人の前へと座る。「ピアノね。まだ確定ではないけど、合唱部の備品になりそうだよ」「あれ? 元々合唱部の物じゃなかつたの?」

「あんたは、何で昨日生徒指導室に呼び出されたと思つてのよ……。合唱部の物の訳ないでしょ……」

と、伊吹の質問に奈羽ではなく岡本が答える。

「じゃあ、なんで部室にあるんだよ?」「……」

「さあ? 神様がくれたんでしょう?」「……」

「そんな馬鹿な……」

「それはね、トリックがあるの。咲良も言つてたよね? 偶然なんて有り得ない、全ては故意の連續により起きた必然つて。つまり、故意の連續の一番最後に私が割り込んだの。私はただ一言、旧校舎二階の一番奥です、って言つただけ。詳しくは言えないけどね」

奈羽は人差し指を立てて自慢げに話す。

奈羽に関しては、何をやっても不思議ではない……。気にしない事だ。

「みんな知らないと思つけど、奈羽ちゃんはね、天才なんだよ!」  
知つているよ……。

「えつへん」

威張るな……。

「はい、はい……」

「もう、日和もお、褒めてよお」

なんか、奈羽が岡本に抱きついている……。

「放せ、恥ずかしい……」

「咲良あ、日和が冷たいよ」

今度は咲良に抱きついている。

「冷たいねえ、私だけは奈羽ちゃんの味方だよ」

「奈羽、俺の所に來い」

伊吹が両手を広げている……。

「あなたは、もつ、それ犯罪……」

あれ？ なんか凄い楽しそうなんだけど？ 僕の時は随分と違う。

笑い声が絶えない世界。なんだか……。この寂しさ……。

何か色々と考えてしまつ。どうして、俺はこんなに考えてしまつんだろう？

放課後、行く宛てもなく歩く。

どうして、こんなにも心が折れそうになるの？

さつきまであんなに晴れていた空は、気が付けば曇り、今にも雨が降りそうだ。

俺は公園のベンチに座り空を眺める。

それは、俺が大人ではないから、この空の景色に影響されて、これ程落ち込んでいるだけだろうか？ それとも、本当に落ち込んでいるのかな？

でも、どうして、あの岡本日和はあんなに楽しそうだったの？ あたしと何が違うの？

別の人だから？ あれは別の人なんだよね？

じゃあ、あたしが岡本日和に戻る為には邪魔なんだよね……？

「俺は何を考えている……。勘弁してくれよ……」

よく考えてみて。昨日後を付けていたのは、あたしだったよね？

じゃ、もしかして、あたしを殺すのもあたし？

「嘘だろ……」

だつて、お家でお布団の中で殺されたんだよ。どうやつて？ 家族もいるんだよ？ 無理だよ、絶対に見つかるよ。家族か家族と同じ様に家の事なんでも知つていないと。ううん。あたしじゃないと無理だよ。

「もつ、止めてくれよ……」

多分、殺して身体乗つ取つたんだよ。あたし超能力者だったよね

？知らない能力もあって別の自分を作り上げるとかも出来たんだよ。だから、今度は今の岡本日和を殺せば、もう一度岡本日和に戻れるんじゃないかな？出来るよね？全部知っているし。

「頼むよ……。止めてくれよ……。俺は誰なんだよ……。おかしいだろ……。なあ？誰か助けてくれよ……。」

涙が止まらないよ……。頭の中で勝手にしゃべるなよ……。教えてくれよ……。俺は木村悠一か？岡本日和か？どっちなんだよ。

その時、ふわりと何かが振ってきた。柔らかい何かが……。

どこかで感じた事がある……。そう、これは人だ。

「悠一、大丈夫だよ。心配いらなによ……。」

優しい声。

片平奈羽だ。

俺は奈羽にしがみついて泣いた。声も無く、ただ、泣いた。

「少し長話になるかも知れないけど、我慢して聞いてね」

彼女はゆっくり話しだした。

「私達五人つて凄く仲がいいよね？何も言わなくても、お互いの気持ちがわかるくらい仲がいい」

奈羽の身体、凄く温かい……。

「家族みたいな感じで何も言わなくていい。鳥は飛ばなくともいいのなら飛ばない。疲れるからね。私達も同じ、しゃべる必要がないならしゃべらない」

凄くいい匂いだ。多分、何かの花？

「でもね。それは自分だけ。相手の事を考えていない、自分勝手な行動なんだよ。相手は不安なんだよ、気持ちがわかつていても不安なんて心地いいんだろ？……。奈羽の鼓動が聞こえる、感じる。すぐくゅっくり。

「ちゃんと思いを伝える事で初めて安心出来るんだよ。気持ちはわかつていても、言葉がないと疑心暗鬼になる。不安が募り、別の思ひが生まれ、いつしかそれが真実になる」

凄く耳に心地いい、ゆっくりとしたイントネーション。

「確かにわかつていい事を改めて口にするのは無駄だと思うかもしれない。でもね、それは意味を伝える為に言つんぢやないの。安心させる為、信じて貰う為の、大事な人への最低限の義務なんだよ。思いを伝える事を疎かにしないで」

いつの間にか奈羽は俺の顔を両手で優しく包んでいた。

「ごめん。何言っているか、わからないよ……。でも、でも、ありますかとう……」

「うん。そうね……。でも、ちゃんと言えたね」

「言つよ、なんでも言つよ……」

「うん。さて、帰りましょ。雨降るから」

そう言つと、まだしがみつく俺を引き離し、立ち上がる。

そして、そつと手を差し伸べる。

俺は反射的にその手を掴んだ。奈羽は優しく微笑んでくれる。

先程までの岡本の声は消えていた。もう夜と言つてもいい暗さだ。でも、これ程寂しい景色の中でも寂しさは感じられなかつた。

女の子と手を繋いで歩く。それは、通常照れなどがあるだろうが、今の俺にはない。

それは、迷子だった子供が母親に出会え、手を引かれている心境だろうか？

ただ、安心できる。

思い出せば、岡本の時もそうだつた。奈羽は身体は小さいのに大きい、俺より頭一つ小さいのに、遙かに俺より大きく見える。ずっとこのまま手を繋いでいたい。しかし家に着いてしまつ。「到着。相変わらず立派なお家だね。雨降るし帰るね。また明日」

「うん、ああ、ありがと……」

俺は呆然と奈羽を見送る。

しかし、奈羽は本当に何者だろう？ 普通ではないといつは感じじる。今、俺の胸にあるのは、ただ、彼女への尊敬と憧れ。女性としてではなく人として。

「そう言えば、岡本語が消えているな……」

だが、岡本日和だつた記憶は変らずある。しかし、俺が木村悠一として、明確に俺は俺としてここにいる。不思議な気持ちだ。

岡本が学校を休んだ。ここは岡本の時とは少し違うが、やはり、昨日同じ事があつたのだろうか？ そう、自転車と接触し、肩を怪我した事だ。

冷静に考えると、あれはれつきとした岡本日和だつ。俺と違うのは、ほんの少し素直であつた。ほんの少し大人であつた。ただ、それだけだろう。それだけの事でこれ程別人に見えてしまつ、人間の可能性に驚く。

ならば、今日岡本が殺害される可能性は高い。だが、昨日の考察も説得力があった。「あたしを殺すのもあたし」の事だ。事実、誰がどのようにして？ の問い合わせに對して、明確な答えを提示出来るのは本人である岡本日和だけであろう。動機に關しても昨日の考察「身体を乗つ取る」でクリア出来る。

そんな馬鹿な……。それは、後付けで説明しているだけだ。事象に對して、そうでなければ説明が付かない、と言つてはいるだけで、事実とは限らない。

どうする？ それでもこの考えは払拭できないぞ？ 一昨日の尾行と同じく、何等かの突発的偶然が重なり、岡本を殺害してしまつシナリオの可能性は否定できない。

俺が動く事で岡本が死ぬのか、動かない事で救えるのか？ どつちなんだ？

無為に時間が過ぎ放課後になつてしまつ。

時間がない。岡本の殺害の正確な時間は不明だが、少なくとも日は暮れていた。

俺は迷いつつも岡本の自宅に足を運ぶ。

裏山に回り監視するか？ 裏山ならば岡本の部屋が見える。

「覗きかよ……」

少し、自嘲してしまう。それでも、岡本日和が心配だった。

怯えていた、そう、あの時の岡本日和は怯えていた。どうしようもなく不安だった。それを取り除いてやりたい。そう思う。陽の明るいうちは人目につかないように奥に行つてこよう。

頂上に近い場所に比較的、平坦な広場がある。

子供の頃にみんなで秘密基地を作った場所だ。

「懐かしいな……」

広場には秘密基地の形跡は跡形もなかつた。当然だらう。少し、周辺を見て回る。

この先に、縦穴がある。大人の背丈よりも少し深い位だらうか？

岡本が落ちて大変だつた事がある。どうやっても登れずに、俺が下に降りて肩車したんだつけ。でも、それでも登れず、俺も登れず。咲良が手を伸ばしている内に転がり落ちて怪我するわ、大変だつた。なぜか、伊吹も穴の中にいるわ……。あれ？ どうやって出たんだ？

「奈羽は何してた？」

いなはづはない、子供の頃は特に俺達は奈羽を中心にしていた。奈羽がいなければ俺達は集まらなかつた。

そうだ、奈羽は二ヶ月程、遠方の親戚に預けられていた時期があつた。その時か……。じゃあ、なんで俺達は奈羽無しで集まつたんだ？ 学校など、その関連以外で俺達は一緒にいる事はなかつたよな？ 特に中学に上がるまでは、お互い嫌いあつていた様な気もする……。俺達が喧嘩していると奈羽が泣くから、仲良さそうにしていて、気が付いたら本当に好きになつていた……。不思議だ……。思い出せない、保留だ。

既に辺りは暗闇に包まれていた。

俺は岡本の部屋が見渡せる場所まで来る。これ以上は近づけない。万が一にも俺が犯人であつてはいけないからだ。かと言つて、ここを離れる事も出来ない。ここが俺の引く、引かないの限界点。不気味な静けさだ……。

遠くでは犬の鳴き声が聞こえる。

そして鈍い音。

.....。

鈍い音？ そう言えば、岡本の時に気になっていた音だ。あれは、  
夢ではなかつたのか。

なんだろうか？ マットの様な物を叩く音に似ている。  
秘密基地があつた広場の方角の様な気もする。

怖いな.....。

俺はゆっくりと広場へと歩く。

静かに、いつも身を護れる様に警戒しながら。  
護身用の武器の一つや一つ持つてくるべきだつた。  
どうして、頭が回らなかつたんだ.....。

結局、俺は俺を信用していなかつた。

自分かもしれないと言ひ思ひが先行しすぎていた。  
無意識の内に他の可能性を否定していた。

致命的だ.....。

.....。

後悔.....。

もう何も見えない.....。

.....。

でも、俺じやなくてよかつた.....。

.....。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1557z/>

---

5番目の蠍

2011年12月5日20時51分発行